

はじめに

19世紀初頭にヨーロッパに成立した、ギリシア・ラテン、聖書、イスラム、インド、イラン、中国、日本などの古典を対象とする近代文献学は、日本では明治末から本格的移植が開始され、現在では国立大学を中心にそれぞれ確固とした基盤を持つに至っている。これらの古典諸学を史上初めて連携させ、共同研究を行うことが特定領域研究「古典学の再構築」の目的であった。

欧米にもかつて例のない、このような大規模な連携研究は、研究者が他の領域の古典学のあり方を知る機会となっただけでなく、人文社会科学や自然科学における、さらに一般に現代社会における古典学の役割の位置付けを強く意識させるところともなった。

古典学は対象とする古典語だけでなく、研究書の諸語（英、独、仏、中など）の習得、歴史、文化の知識の獲得など、一人立ちまで長期の準備期間を要し、それに従事する研究者は領域外の研究を知る機会が乏しくなりがちであった。20世紀後半からさらに拍車がかかった専門化傾向は、同じ領域の中でさえも研究者間の相互理解が得難くなるまでになっていた。このような状況において、「古典学の再構築」の領域を越えての交流が、方法論や本文理解に大きな進展をもたらしたとしても驚くには当るまい。この事は、別に刊行した研究成果報告書8冊（総括班研究1冊、調整班研究7冊）に報告した通りである。

現代の昏迷とは、巨視的に見るなら、紀元前1千年期半ばの「軸の時代」に諸文明に現れた新思想の価値観が、科学技術の急激な進展による現代世界の変容に対して不適合を露呈しているということであろう。「軸の時代」に新思想を提供した古典群は、その後それぞれの文明においてより新しい古典を創造したり、時代に適した新解釈を付されたりして今日まで諸文明の精神基盤を形成してきた。現在必要とされることは、諸文明の古典に立ち帰り、それぞれの価値観を、地球運命共同体を自覚した、地球時代にふさわしいものへと衣替えさせることである。これは現代社会の変化の急激さに鑑みて、国際的連携の下で今後数十年を要する大規模な作業となるであろう。

この新しい価値観の形成は、古典学が古典に含まれる基本的価値を抽出し、確実な資料として提示することによって初めて可能となると思われる。このように考えるならば、古典研究者が自らのこの社会的、歴史的責務を自覚したこと、これこそむしろ「古典学の再構築」の最も重要な学術的成果ではなかろうか。それはこの自覚が解釈学としての

個々の古典研究を活性化せずにおかないばかりでなく、その成果が現代社会の新しい価値観形成への基盤的役割を果たすからである。

*

「古典学の再構築」は、最後を締めくくる第7回シンポジウム「創造の源泉としての古典」を内山勝利実行委員長の采配の下、昨秋、京都で開催した。本号はこれを特集している。欧米、台湾、日本から招いた8人の研究者は、古典が古来どのような創造的役割を果たしてきたかを語って下さった。パネルディスカッションでは、確固とした存在論、認識論にもとづく古典の世界観を再検討し、諸文明の伝統を活性化させ、それぞれを現代世界にふさわしいものへと衣替えさせることこそが必要であるとされた。このような議論を喚起した各講演の概要は次のとおりであった。

(1) [E. クレイク・英] ヒポクラテス医学（ギリシア・紀元前5世紀）が現代に至るまでの西洋医学の大枠を決定付けたが、それは医学知識のみならず、医学を「病による苦しみからの開放」とする理念（従って治癒不能の場合は治療を断念することもある）や、医者守秘義務など医の倫理をも含むものであった。

(2) [G. バビニオティス・ギリシア] 古典ギリシア語の文化創造への貢献。古代ギリシア語の繊細で精緻な文法組織は文学や哲学の創造を大いに助け、ついには豊かな語彙をもつ古典ギリシア語が成立し、近代西欧語の基本語彙や新語創造の素材となってきた。

(3) [S. ヤフェト・イスラエル] 「聖書の民」としてのユダヤ人の歴史は、聖書が前5世紀と後1世紀の危機の時代に定立されて以来、ユダヤ人のアイデンティティー維持に中心的役割を果たしてきたことを示しているが、古典学の再構築は、それぞれの文明が他のよいものを取り入れ、より広い視野のアイデンティティーを確立しようと努めることに他ならず、極めて重要である。

(4) [R. ヤローン・イスラエル] 古代近東法の比較研究の歴史。「出エジプト記」にある「目には目を」などの規定の発展は、19世紀半ばにはローマ法やユダヤ法と、20世紀初頭にはハムラビ法典（前18世紀）と、また1922年にはヒッタイト法典、さらに1948年にはエシュヌナ法典と、1954年には世界最古であるウル・ナンマ法典（ハムラビより350年古い）と比較されることにより、詳細が明らかにされてきた。

(5) [J. テキシドール・仏] プラトン、アリストテレスの哲学は、紀元初頭からシリアのアラブ人に受け入れられ、8世紀以降はイスラーム教徒もこれを継承した結果、12世紀コルドヴァのアヴェロエスの著作などイスラームの学術が、西欧へ大きな影響を及ぼすこ

ととなった。

(6) [林慶彰・台湾] 中国では2千年以上の間、政治の準則、社会の規範、人生の教養として、経書は絶大な影響を及ぼしてきた。経書の理解なくして中国文化の理解はありえず、近年の風潮に抗して、研究者は経学の価値を広めなければならない。

(7) [大谷雅夫・京都大学] 「歌人は居ながら名所を知る」という諺は、写実主義に悖るとして正岡子規には否定されたが、本来は歌によって人情を知り、物のあわれを知ることを言うものであった。和歌は旧来の表現に新しい発想を盛り込んで創造を重ねてきた。新しい心は、古い言葉なくしてはありえないのではないか。

(8) [M. ヴイツェル・米] インド人は印欧時代から継承した「再生」思想と前5世紀に現れた「業」思想とを結合して「輪廻」思想を形成し、以後それを世界観としながら、古い素材に新解釈を重ねつつ宗教、文学を多様に展開してきた。歴史的には全国的標準化（マウリヤ、グプタ、ムガル・イギリス支配・現代）と自由な地方化（上記の時期に挟まれた期間）の時代を交互に経つつ、階層的記述（アルゴリズム）、自然と人の要素の等視、俗と非俗の二重世界観などの特徴は一貫して認められる。合理的物質主義、経済効率主義の克服には、これらインド思想の貢献も期待される。

*

平成10年に開始した「古典学の再構築」は本年3月を以って終了することとなった。研究を終えるにあたり、特定領域研究の企画と推進に尽力いただいた多くのかたがた、助言と励ましをいただいた石井紫郎、池端雪浦本特定領域両主査および石井米雄、大崎仁の両氏、上山春平、中根千枝、藤澤令夫、高崎直道の本特定領域評価委員、日本学術会議で助言をいただいた吉川弘之、吉田民人、戸川芳郎、板垣雄三、土居範久、石川忠久、逸身喜一郎、辛島昇の諸氏、実行の種々の局面でお世話になった文部科学省の研究振興局学術研究助成課の皆様や宮脇和男氏（現学術振興会）、松川誠司氏に、「古典学の再構築」に携わった研究者を代表して心から厚くお礼申し上げます。

なお本特定領域の準備時から大きな役割を果たされた江島恵教教授（東京大学）は平成11年5月に急逝された。ご冥福を祈りつつ謝意を捧げる。

領域代表 中谷 英明